

巻頭言

のフリをした祝福です

役所の省史にしろ、民間の社史にしろ、正史として纏めるとなると鯨張ったものになりますし、読み易い私史となるとどこまで信をおいて良いか、折角努力を注いだ以上役に立つものとはしたいが…どこでもある悩みです。

それでも何か欲しい。でっかいものでは、ギボンのローマ帝国衰亡史は、欧米知識人ならだれでも読んでいて自在に引用する。鯨岡兵輔環境大臣は、「経験に学ばない者は鶏人間だ！鶏は追っても追ってもやっぱり同じところにやってくる」と喝破されました。やはり50年の経験は残したい。

若い職員の方々にそう思っていただいたのは有難いし、職員OB等かつての関係者にも大変ご協力を頂いた、もっとも機会があれば一言ぶちたいと言うのがOBの性癖でしょうから左程気にしなくてもいいのかも知れませんが、とにかくこの50年史はそういう賜物です。

回顧、経過の記録も、所詮、筆者論者の思念の産物ですから、それぞれの知見、視野、精神等の深さ、広がり、高さを超えられません。どれほど役に立つか分かりませんし、論難される点があれば、私もその一員として責めを負いますが、せめてお汲み取り頂ければということが二つあります。

まず、環境庁・環境省が、「環境の保全こそは、行政が注力しないとイケない最も国民に密接した政策課題だ」と信じて懸命に取り組んできたことが浮かび上がればいいなあと思えます。力及ばずと言うことはあるにせよ、いつも人々に寄り添うという気持ちだけは持ち続けたと思えます。

そして環境庁・環境省こそ、大臣をヘッドに、副大臣、大臣政務官という政治家の司令官の指揮の下、忠実に、少数であってもそれなりに精強な職員スタッフが身を粉にしてきた役所であり、大臣等政治司令官のリーダーシップに大いに頼ってきた役所だということです。環境庁発足から様々な変遷を経てようやく築かれたワンチームだと思います。これが二つ目です。

未来は若い人のものであり、歴史、経験に拘泥すべきではありませんが、この二つなら、これから環境省に関わる方々、縁あってこの50年史をご覧になる方々にも共感につながり、将来への祝福となるのではないかと、僭越ですが、巻頭言のフリをして祈らせていただく次第です。

環境庁1期生、元環境事務次官

西尾哲茂

